

Traduction et présentation de
« Un mouvement des jeunes en Allemagne » (1932),
Jean Cavailles

Daisuké Nakamura

Résumé

Jean Cavailles (1903-1944) est connu pour avoir été un épistémologue des mathématiques et un héros de la Résistance. Nous présentons ici un aspect moins familier de sa pensée : ses recherches, menées alors qu'il séjournait en Allemagne dans le cadre de la préparation de son doctorat de philosophie en 1930-1931, ont aussi porté sur l'histoire d'un mouvement de jeunesse datant de la fin du XIX^e siècle. Les résultats ont été publiés à son retour en France dans cinq articles. Le premier est ici traduit. S'y dégagent certains traits communs entre son épistémologie et son investigation socio-historique de la pensée religieuse.

Nous espérons que cette traduction apportera une contribution à la connaissance de la philosophie de Cavailles et à l'étude de l'histoire allemande avant la seconde guerre mondiale.

ランス人哲学者による同時代の分析としても貴重であり、カヴァイエス研究という枠を超えて、ドイツ宗教思想・社会思想史研究にも本翻訳が資することができれば幸いである。

〔付記〕この翻訳と解題は文部科学省科学研究費補助金による成果の一部であり、連携研究者である原田雅樹氏のコメントに感謝致します。また規定字数を大幅に超える原稿でありながら、全文掲載を許可して下さった紀要『雲雀野』の編集委員、及び総合教育院の各位にもお礼を申し上げます。

戦後の運動に分けて詳述する。第三期において、運動は若者をばらばらに振り分け、文化、教会、社会のそれぞれに力点を置くものになったとされ、ナシヨナリストの運動（ゲルマニスムの復活や中世への回帰）、宗教運動（バルトやシュタイナーの思想）、社会運動（農業コロニーの開拓）の三つが取り出される。その上で、こうした青年運動に對して、新たな秩序を作り出す運動としては失敗したが、青年としての文化解放たる反抗としては成功、という評価を「内在的な理由」を探求するという姿勢から導いている。そして、初期の運動精神がなお息づいている数少ない場所として、カトリックのクイックボロン、プロテスタントのノイヴェルクを挙げた上で、結論部にて青年運動の本質を、青年が己の本質に割り当てる永遠的価値——青年の「内的資源」——によってなされてきた点に見出し、再開や断絶をその基本特徴として指摘している。青年運動における子供じみた態度は、献身と内的な豊かさという別のアスペクトによって埋め合わされ、青年の集団は「より根本的な価値の探求」をおこなうことで自らの枷を解き放とうとするのだ、と。

ここで主張された「内在的な理由」の探求とは、数理哲学における彼の方法論と呼応するものであり、さらには、断絶や絶え間ない再開を肯定するという点にも数理哲学との共通点が見出される。G・ハインツマンの仕事などに例外があるものの、従来のカヴァイエス研究はエピステモローグとしての彼の側面を扱うのが主であったが、この翻訳を機に、より統合的な彼の哲学・思想に関する研究が進むことを期待したい。また、この論文はドイツ青年運動に對する、傑出したフ

【解題】

本稿は「Jean Cavailles, « Un mouvement des jeunes en Allemagne », *Annales de l'Université de Paris*, 7^e année, n.° 2, 1932, p. 148-174 の全訳である。この論文は後年、別の雑誌にも再録されたが (*Philosophia Scientiae*, vol. 3, cahier 1, 1998, p. 1-21) 、タイトルの変更やテキストの異動が見られる。亀甲括弧内は訳者による補足を表し、原文に含まれるドイツ語、ラテン語については可能な限り訳註に記載したが、省略したものもある。参考文献についても、事典の類は逐一注記しなかった。なお算用数字は原註を、小文字のローマ数字は訳註をそれぞれ示す。

ジャン・カヴァイエス (Jean Cavailles, 1903-1944) は両親ともプロテスタントの家系に生まれたサン＝メクサン出身の数理哲学者であり、対独レジスタンスの闘士としても知られる。高等師範学校に入学、数理哲学を専攻して、『抽象集合論の形成についての考察』、『公理的方法と形式主義——数学の基礎の問題についての試論』の二つで博士号を取得、一九三八年に出版した。前者は集合論、後者は数学基礎論に関する重要な仕事であり、フランスにおける数学のエピステモロジーを今なお代表する著作と言ってよい。第二次世界大戦が始まると当初は従軍していたが、休戦協定後はクレルモン＝フェランで教鞭をとる傍ら「南部解放」を組織し、教師兼レジスタンス活動のリーダーという二重生活を送る。一九四二年九月に一度捕まるも脱走、その後パリにて組織「コオール」を立ち上げる。ロンドンに行き、ド・ゴープ率いる「自由フランス」と接触するが失望し、帰仏後はより過激な

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

活動へと身を投じていった。そして一九四三年八月、ドイツ警察に捕まり、アラスにて翌年一月、名を明かさぬまま銃殺された。彼が一九四二年の虜囚中に執筆した遺稿『論理学と学知の理論について』は、戦後フランス哲学の出発点を告げる里程碑的著作として名高い。

カヴァイエスは博士論文執筆のために、ロックフェラー奨学金を得て一九三〇—三一年度、ドイツに滞在した。彼はベルリン、ハンブルク、ゲッティンゲン等で当時最先端の数学と論理学を学ぶと共に、ハイデッガーの講義に出席し、フッサールとの個人的な面会も果たしている。しかし彼がドイツで吸収したものは何も数学や哲学だけではない。そもそも彼が奨学金を取得したのは、ドイツにおける青年運動を研究するというテーマにおいてであった。カヴァイエスは高等師範学校在学当時から雑誌『信と生』などにキリスト教関係の論文を掲載していたが、彼はこの宗教社会思想史とでもいべき領域においても、熱心な研究をドイツで継続していたことになる。そしてその成果は帰仏後、一連の論文となって結実する。すなわち一九三二年の「ドイツにおける青年運動」(本論文)と「ドイツとドイツ国議会」、一九三三年の「ドイツ・プロテスタントイスマの危機」、そして一九三四年の「ドイツ・プロテスタントイスマ内部の抗争」と「ドイツ・プロテスタント教会の危機」の五本である。

ここに訳出した論文は一連の仕事の劈頭を飾るものであり、それゆえその後の基調を定めたものでもある。彼はまずドイツの青年運動を、第一期の情動的で素朴なワンダーフォーゲル、第二期の綱領と理論を伴う組織の成立(ヴィネケンの自由ドイツなど)、第三期の第一次大

formation de la théorie abstraite des ensembles [1938] dans *Philosophie mathématique*, Paris, Hermann, p. 28-29.)

- xxxiii (独) Jugendführung
 xxxiv 原文中では丸括弧は閉じられていないが、一九九八年版の補完に従う。
 xxxv ロマーノ・グアルデーニ (Romano Guardini, 1885-1968) はイタリアのヴェローナに生まれ、ドイツで育ったカトリックの神学者。第二次世界大戦前にはベルリン大学の「宗教哲学とカトリック世界観」の講座で教え、戦後もミュンヘン大学などで教鞭をとった。青年運動の指導と典礼復興運動にも力を入れ、ローテンフェルスの「クイックボルン」の精神的支柱であった。カヴァイエスは一九三二年八月、当地に滞在し、グアルデーニに会っている。
- xxxvi (羅) *Qui habitat in adiutorio Altissimi, in protectione Dei coeli commorabitur*: 詩編九一の一より。
- xxxvii ヴォルフラムの叙事詩『バルチヴァール (Parzival)』及びそれを元にしたワグナーの舞台神聖祝典劇『バルジファル』のことであろう。前者は、少年バルチヴァールが騎士の生活に惹かれて母を捨てて世に出、過失を重ねながらも宮廷騎士となり、聖杯を得る物語である。
- xxxviii (仏) *pasteur fonctionnaire*
 xxxix (独) *Offensein*
 xl パウル・ティリッヒ (Paul Tillich, 1886-1965) はドイツ生まれのプロテスタント神学者。ナチス批判により公職を追放され、アメリカに帰化した。彼は批判力・文化形成力としてのプロテスタントキリスト教を展開、キリスト教の教理を人間の実存状況から起る問いと相関させる方法を考案して、神学と哲学、宗教と文化、存在と実存等の相関関係を扱った大著『組織神学』(一九五二―六三)などを残した。
- xli (独) *die neue Sachlichkeit*
 xlii 「民族的観察者」を意味するナチ党の機関紙で、一九二〇年から一九四五年まで発行された。
- xliii 本論文の最初のセクションによれば、クアフェルステンダム通りには一九世紀末のヴェイルヘルム文化の醜悪さが反映している。
- xliv 当時ドイツの産業的中心地であったルール地方を、フランスとベルギー

が一九二三年に占領した事件のことを指すか。ドイツ博物館の開館も同じ頃(一九二五年)である。

- xlv (仏) *ressources intérieures*
 xlvii (仏) *rupture* カヴァイエスによれば、数学もまた跳躍や断絶をほらみながら自己展開していくものである。「数学における主題化において」問題なのは先行する作用を、断絶にもかかわらず延長することで、新たな作用を定立することである(…)」(Jean Cavailles, *Sur la logique et la théorie de la science* [1947], Paris, Vrin, 1997, p. 46. 邦訳ジャン・カヴァイエス『論理学と学知の理論について』近藤和敬訳、月曜社、三四頁。)
- xlviii (仏) *causes intrinsèques* この箇所は「原因」という言葉を除き、概念の内的紐帯を重視するカヴァイエスの数理哲学を思い起させる。「意識はその度ごとに観念の直接的なものの中にあり、観念の内て失われ、観念と共に消え去るのである。そして意識が他の意識(これは意識の他の契機と呼ばれがちなものかもしれない)と結び付くのは、それらの意識が属している観念の内的紐帯によつてのみである。」(Jean Cavailles, *Sur la logique et la théorie de la science, op. cit.*, p. 90. 邦訳前掲書六七頁。) 訳註 xxxii も参照。
- xlviii 対独レジスタンス活動を率いることになる、カヴァイエス自身の姿と重なる箇所。以下は姉ガブリエル・フェリエールによる評伝の一節である。「過激な活動に身を投じる弟を諫める」私に彼は応えた。「多分姉さんが正しいんだらうね。でもね、ご存知の通り、そこに危険があると、僕はそれを他の人にさせることができないんだ。危険があるところに、リーダーはいないといけない。それにね、彼は笑いながら付け加えた(…)―それはとても面白いのさ!―とても面白い…。それはまさにジャンの性格の一つだった。挑戦と悲劇を一緒にしてしまうのだ。ある意味では、彼は『賢く』なんてなかった。彼は人生を愛し、良いワインを、旅を、ときに贅沢と華美を愛した。(…)そしてこれらのどれよりも、彼は危険を愛した。子供のとき屋根から飛び降りた、それがどれほど両親を怖がらせたことか…。山を登攀し、馬を操って、大した乗り手でもないのに、プロでさえ恐怖を抱くような障害へと向かって行った。」(Férrières, *Jean Cavailles, op. cit.*, p. 217.)

義の用語を用いて神秘体験を論じ、ドイツ神秘主義の代表的人物とされる。

xix 青年民族同士団：(独) Jungnationalen 青年ドイツ騎士団：(独) Jungdeutschen Orden

xx 十字架のヨハネ (Juan de la Cruz, 1542-1591) はスペインの神秘思想家。観想生活を旨とするカルメル会に入会、そのアビラのテレジアと出会い、男子カルメル会改革の中心人物の一人となる。人間の魂が神との合一に向けて辿る過程を入念に叙述・分析した『カルメル山登攀』や『暗夜』などを残す(鶴岡賀雄『十字架のヨハネ研究』創文社、二〇〇〇年を参照)。なおカヴァイエスは高等師範学校時代に十字架のヨハネに関心を寄せている (Gabrielle Ferrières, *Jean Cavailles. Un philosophe dans la guerre 1903-1944* [1950], Paris, Félin, 2003, p. 55)。

xxi ヴェール・ド・ペリユル (Pierre de Berrulle, 1575-1629) はイエズス会のクレルモン学院で学びつつも、フラマン神秘主義も受容した神学者。「献身の神秘主義」から出発した彼は、新プラトン主義を背景とするこの神秘主義と、スペインのカルメル修道会を経由した、キリストに対する信仰との融和を試みた(国府田武『反宗教改革とフラマン神秘主義』ピエール・ド・ペリユルを中心に、『フートルダム清心女子大学紀要文化学編』第一巻第一号、一九七七年、三九一五六頁を参照)。

xxii オイゲン・ディーデリヒス (Eugen Diederichs, 1867-1930) が設立した出版者。彼はホーエン・マイスナーでの集會に加わった「セラ・クライス」という民族主義的な団体の主宰者でもあった(ラカー『ドイツ青年運動』前掲書、五四頁)。

xxiii いわゆる「領邦教会制」であったドイツ帝国では、教会は公法上の宗教団体とされたものの国家による監督に服していたが、ヴァイマル憲法において、「国の教会は存在しない」ことが明記された。但しキリスト教の特権的地位(例えば教会税を徴収する権能)は引き続き保証されていた。ドイツの政教体制は政教分離というよりも、国家と教会の「同格」によって特徴づけられるとされる(山本和弘『ドイツにおける国家の宗教的中立性の構造』憲法上の規範的根拠と解釈学上の効力)、『早稲田法学会誌』六八(二)、二〇一八、三九七-四五二頁を参照)。

xxiv アドルフ・ハルナック (Adolf von Harnack, 1851-1930) はベルリン大

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

学教授を務めたプロテスタント神学者。『教理史教本』(一八八五-七)では、キリスト教教理の成立を福音がギリシア化していく過程として捉え、また代表作『キリスト教の本質』(一九〇〇)では、パウロを含む後代の二次的な産物から区別されるべきイエスの純粋な福音を確立することを目指した。

xxv カール・バルト (Karl Barth, 1886-1968) は二〇世紀を代表するプロテスタント神学者の一人。スイスのバーゼルに生まれ、宗教社会主義の影響を受けるも次第にそこから離れ、一九一九年に『ローマ書』を刊行、そこから〈神と人間の絶対的な質的差異〉や信仰の逆説性に基づく「弁証法神学」を展開していった。

xxvi (独) deuten

xxvii フリードリヒ・ゴーガルテン (Friedrich Gogarten, 1887-1967) は、もともとトレルチのもとで学んでいたが、のち弁証法神学者としてバルトと共闘した神学者。一九三三年にバルトと決別、第二次大戦後はハイデッガーに関心をもち、実存主義神学を展開した。

xxviii (独) Not

xxix シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) は人智学の提唱者。物質文明が発達した時代において、人間のうちにまどろんでいる高次の認識能力を開発し、個人の自己実現と社会の進歩に役立つ方法を提示しようとした。

xxx (独) Bund der deutschen Jugendvereine

xxxi ヤコブ・ヴィルヘルム・ハウアー (Jakob Wilhelm Hauer, 1881-1962) はケンゲナー同盟や青年運動の中でも最大規模の同盟「義勇軍」に参加していたが、その後ドイツ信仰運動のイデオログとなった(ラカー『ドイツ青年運動』前掲書参照)。

xxxii (仏) raisons intrinsèques このセクションには、概念の内的連鎖を軸とした数学や学知の予見不可能かつ自律的な生成を主張する、カヴァイエス自身の数理哲学と通底する態度が見られる。「換言すれば、数学的に基礎付けられた、数学の生成の客観性が存在する。問題の要求こそが、いかなる反省も「それまで」無益と感じてこなかった偶発的なものを、方法から取り除くのである。[...]連鎖がそこに由来する中心的直観において内的統一性を覚知することは可能であり、また、現象の内的記述によって方法的にこの統一性を明らかにすることも可能である。」(Jean Cavailles, *Remarques sur la*

〔訳註〕

- i (独) Jugendbewegung
 ii 「渡り鳥」を文字通りには意味するワンダーフォーゲル (Wandervogel) とは、あちこちを遍歴する徒歩旅行によって身体を鍛えたと共に、素材で簡素な生活を通じて精神を養おうとする青年運動。次の段落で出てくる、フィッシャーの活動がその出発点とされる。
 iii (独) Schwung
 iv 表記「Strelitz」に従って訳したが、「Steglitz」(「シュテテグリッツ」)の誤記と思われる。
 v Walter Flex, *Der Wanderer zwischen beiden Welten*, 1916. カヴァイエスは「Wanderer」を「Voyageur」(旅人、探検家)と訳している。
 vi (仏) intérieur 次の引用後に出てくる「内面の」も同じ語。以下、「精神(的)」という形容詞が使われている場合、ルビで「スピリチュエル」とあるもの以外、すべて元はこの語である。
 vii (仏) être pur « pur de... »で「〜を欠く」を意味することにも注意。
 viii (独) Bereitschaft
 ix (独) Weltanschauungen 二〇世紀初頭のドイツではこの語が学術用語としてよく用いられていた。ハインリッヒ・ゴンペルツの『世界観学』(一九〇五—八)、晩年のデイルタイの論文「世界観学の類型と形而上学的体系におけるその形成」(一九一一)など。
 x ヴィネケン (Gustav Adolf Wyneken, 1875-1964) は、「青年文化」を中心の理念として活動した教師。一九〇六年にヴィツケルスドルフに「自由学校共同体」を創設、自由ドイツ (Freideutsche) 結成にも積極的に参与するなど青年運動を牽引し、ホーエン・マイスナーの集会では、結果を総括する挨拶をおこなった(ウォルター・ラカー『ドイツ青年運動—ワンダーフォーゲルからナチズムへ』西村稔訳、人文書院、一九八五年を参照)。
 xi ワンダーフォーゲルの年長メンバーを統合する組織「自由ドイツ青年団」を作る目的で開かれた集會。これは、既にドイツ中に広まり、オーストリアとスイスでも定着したワンダーフォーゲルの組織をつなぐ統一体を形成すべき、という議論を背景とされていたが、統一体は結局作られることなく終わった(ラカー『ドイツ青年運動』、前掲書、五二—六〇頁を参照)。

xii Arthur Bonus, *Zur Germanisierung des Christentums*, Jena, 1911. カヴァイエスは原題で引いている。アルトゥール・ボーンヌ (1864-1941) はデューデリヒス出版社の主要作家となった牧師。「神話」とみなすことでキリスト教がゲルマン化されうると考え、当時のルター派教会の墮落を主張、あわせてユダヤ教徒への排他的な発言をおこなった(斎藤正樹「ヴァイルヘルム期ドイツにおけるキリスト教のゲルマン化について—アルトゥール・ボーンヌ (Arthur Bonus) の思想に着目して」、『史観』、一六六号、二〇一二年、一五—一五六頁を参照)。

xiii 北欧神話に出てくる、「世界樹」とも呼ばれるトネリコの巨木。また、この箇所の前後に出てくる「イルミン」及び「イルミンのアーチ」とは、ザクセン人が同様に崇拜していたとされる世界樹「イルミンの柱」のことと思われる。

xiv シェイファー (Wilhelm Schäfer, 1868-1952) は自然主義から出発した作家。郷土愛が高く、次第に民族主義的傾向を帯びていった(一九二二年の『ドイツ魂の二三の書』など)。逸話集の評価が高く、一九四一年にゲーテ賞を受賞。

xv (独) Greifening 第一次世界大戦中に登場した反ユダヤ主義のグループ(ラカー『ドイツ青年運動』、前掲書、一一〇頁参照)。

xvi オトガー・グレイフ (Otger Graf) は青年運動における右翼過激派の代表的人物。ドイツ語をあらゆる外国の影響から浄化することやユダヤ的資本主義の排撃を主張、ヒトラー青年団にも影響を与えた(ラカー『ドイツ青年運動』、前掲書参照)。

xvii エーリヒ・ルーデンドルフ (Erich Ludendorff, 1865-1937) は、第一次世界大戦においてドイツ帝国陸軍主計総監を務めた軍人。大戦後のいわゆるミュンヘン一揆の中心人物の一人でもある。彼の作ったタンネンベルク同盟は、ユダヤ、フリーメイソン、イェズス会等の超国家的な力を攻撃する文書を発行した。

xviii ヘーリアントは古高地ドイツ語で書かれたゲルマン英雄叙事詩を継承したキリスト伝。ヴォルフラム (Wolfram von Eschenbach, 1160/80-1220) は『バルチヴァール』で知られるドイツ中世盛期の代表的な宮廷詩人。「マイスター・エックハルト」の名で知られるエックハルト (Johannes Eckhart, 1260-1328) は、アリストテレスとトマス・アクィナスの思想を受け継ぎつつも、新プラトン主

始まってしまったが故に、事物と一体化して全面的に再開する可能性のことである。青年は失敗することもあるが、その歴史の重みは残る。それも、出直しと解放という素材に対して残るだけでなく、何よりも「伝えられてきたもの」からの離脱、ただ一人で行動することへの配慮に対して残るのである。外から見ると戸惑わせるような見かけ上の粗暴さはここから出てくる。過去の価値、文化的な豊かさ、西洋的な秩序、こういった何ものも彼らの目には敬うべきものと見えないのだ。そこでリユーベックのトーマス・マンのように、年を重ねた人は驚くことになる。「だが残念なことに、君たちはすべてを破壊しようとしている――」彼らは、十年前の「明るい瞳をもった若者たち」との結び付きを見ようとしな^い。また、彼らが賞賛していたのが、断絶の本^質の本当の責任者たる自分たち自身なのかもしれない、ということを見ようとしな^い。人間性という意味での人間に対するこの無関心によって、また〈他者〉や事物の刺激的な冷たさ――事物とは目覚めさせて救う、唯一つの堅固な抵抗である――を探究することによって、彼らは精神の現在の成り行きを、過激な青年を準備したのである。

しかしこうした年上の人に抗する人も過激派のリーダーも、彼らに対する思い違いをするという誤りを犯しているかもしれない。偶発的な危機が、複雑な大衆化へと態度を硬化させてしまった。(青年運動の)生はそのニュアンスと連続性を伴ったまま、なお下に残っている。ところで、この連続性が本当に存在するのならば、そして過激な行動の広がりが連続性の存在を信じさせてくれるのならば――青年は、自分が青年であるという感情をもったり、さらには青年の遺産を受け継い

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

だりといった内的な原因なしに全体を丸ごと変えはしない――敬意を欠いた一見あまりに子供じみた態度(子供は何ものにも依拠せず、自ら危険を冒すがゆえに全てを転覆しようとする)は、献身と内的な豊かさという青年運動の別のアスペクトによって埋め合わされるのである。彼らは自分たちに破壊する権利があると思っている。彼らの目からすると、自分たちの生に関わることだからである。だがこの生は彼らにとっては文化〔教養〕の源、つまり置き換わりうる者たちの過剰さでもある。このことの証拠は、不幸にも御されてしまったこれら集団の、確認するのが困難な真率さの内にある。どんな学も、その開始時においては真なるものが逃げ出すことはないが、そうした学の開始時に与えられる勇氣が、こうした真率さの内に現れるのである。集団を現在の相において説明するためには、過去を引き合いに出さなければならぬが、そのとき過去は、集団が曖昧な仕方ではか予期していないものを、集団の内に想定することを要求する。そこで想定されるものとは、集団が自らを縛っている枷をいつの日かおそらくは解き放つような、さらに根本的な価値の探究なのである。

もはや哲学的な不安ではなく行動的安全、すなわち停止である。これが「確固とした人間」なのだ。「冷たく簡素な自分の存在に親しい部屋の中で、私は至高の存在のイマージュも象徴も発見できなかった。」打ち砕かれた人間的本性について、日々経験される墮落について、この人間に話しても無駄である。話しても驚きと憐れみしか呼び起こさないだろう。この者は世の中を知っているし、師は彼に〈無〉、〈配慮〉、〈不安〉というハイデッガーによる人間的三つ組を示すのだ。彼はこのことを、存在する事象〔事物〕として受け入れ、また彼はその事象に関して存在する。「彼は現実について然りという者であり、現実の近くに身を置く者である。」さらに、拵えられたあらゆる法則に、また現実と関わらないあらゆる要求に、意識的であれそうでない仕方であれ、身を背ける者でもある。この人間は勇士ではない。理想ももたず、スタイルにも捕われない。彼は恐れを知らないものであり、〈存在〉の内で現にあるのである。夢想することも逃げることもなく、彼は己の運命を知り、定められた場所に身を置き、闘うのだ。この人間はエゴイストではない。他者に対する慈悲ももたなければ、自分を慢心することもなく、自分の身の置き場所を正確に知っている。だが厳しい一種の仲間意識や、隣り合って仕事をおこなう連帯といったことが、おそらくは最も確実な絆によって彼を他者と結びつけている。そして最終的にこの人間は沈黙する。現在の人間の定義、それはマックス・シェーラー言うところの「形而上学的な軽快さ」である。それは、考えないようにするために気を紛らわすような表面的な軽さではなく、己を位置付けて仕事を遂行するような存在の軽さである。彼自身

のものであって、その向こう側には何もないからこそ軽いのだ。それゆえ、神なしに、と言うことはできるが、信仰なしに、と言うことはできない。その信仰は全体の内では生きている者の、そして「時間が、己の一定した歩みにおいて諸々の時間を通してことで、己と共に到来する」(Building) ことを見、触れる者の信仰である。

以上が、駆け足で描き出された「現在の人間の」肖像であり、少なくとも、全体としてはある種のエリートにのみ当てはまるものである。しかしこの肖像は粗野と献身、金銭への関心と純粹さという幾つかの矛盾を説明している。他者を立ち上げられるために、そして、若者の間にしばしば実際に見られる、無言で少しばかり険しい顔つきを、最近の閏兵式や投票と調和させるために、青年運動が必要なのだ。世代を機械的に対立させるのは、どこにおいてもあまりに単純な作業である。それはあたかも、根本的には変わらない人間という素材に対して、成熟する頃に働かかける多様な環境が魂を加工するのであって、しかもその際本質的な近しさは日付に結びつけられるのだ、とみなすようなものである。だが戦後ドイツの場合、このように対立させることは、決定的な点に対して人間的伝統の貢献を見誤ることである。その貢献とは、二五年の間、青年は自己を定め、生きようとしてきたのだが、それは外部からの決定論や環境に対してではなく、また展覧会とクアフルステンデム通りのもつ同時代性^{同時代性}と対立するような、ドイツ博物館やルール地方^{ルール地方}と同時代的なものとしてでもなく、自分自身の内的資源^{資源}によってなのだ、という事実である。ここで言う内的資源とは、青年が己の本質に素材に割り当てる永遠的価値のことであり、また、

の信一、それは十年前の自分たちの熱狂の有効かつ持続的な遺産であると、彼らには見えているのである。

*

しかしこの接続への意志は、その意志しか働いていない場合には、間違えるのではないだろうか。そして、青年運動の何人かの専門家が新しい世代と先行世代の間の根本的な断絶を告発するとき、彼らは正しいことを言っているのではないだろうか。社会主義の青年たちの、またヒトラー派の青年たちの衣装や言葉といった表面的な（以前の青年たちとの）類比に騙されてはならない。リアリズムとシニシズムの混じり合った、異なる精神性がそこでは支配しているのである。「新たな事象」^註、つまり世俗的な実践への傾倒、技術と金銭への傾倒があるのだ。太陽や森林よりも銀行の瓦落が、神学よりも党の綱領が関心を引く。まさに一つの世代がインフレーションの過程で形成され、法令、破産、失業を経験し、問い直されて岐路に立つ社会の組織全体と国家を見、そして過激党派の間で火が吹かれるのを聞く――なすべきことは何もないのだ。この世代が政治以外の関心をもはやもたないとしても、そもそも彼らがドイツでただ一つの世代という訳ではない。この世代は体系や観念論を疑い、辛抱強さを欠いてつらい思いをしているのだが、日々の出来事^{イストリヤ}が彼らをそこへと押しやったのだ。しかしあまりに単純な見かけを疑わねばならない。その見かけとは投票の瞬間のことではなく、一つの世代を表現する党に署名して入るといこう

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」（翻訳と解題）

とである。国家社会主義に投票する何百万という人は、『フェルキツシャー・ペオバクター』^註を毎日読みはしないが、それでもやはり学問的には幼稚な学説を取り入れる。そもそもイマーージュの中に、対立する特徴があるのだ。いったいどのようにして懐疑主義を、過激な党のもつロマン主義と結び合わせることができるのか。共産主義者にもナチス党员にもメシアニズムが、つまり階級のない社会、あるいは第三帝国を生み出そうとする革命への期待があり、任務が絶対的に信ずる人種概念がある。結局、しかるべき党が起こす金融スキャンダルに対する憤り――これは最も有効なプロパガンダの道具であろう――といった徳のひけらかしは、観念論の残滓をまさに想定させることになる。完全な変革、そして民衆とエリート階級の抑えがたい飛躍、こうしたことを信頼して希望をもつこと、さらにこうしたことに連帯して身を捧げること（ほぼ毎週様々な陣営で現れる残念な赤字の数字は、このことをよく示している）は、青年運動の中に存在した最良のものを、党の利益のために歪曲するようなものではないか。新しく起きたことはおそらく、目的と連帯の狭隘化である――人文的な教養（文化）の代わりに国の経済繁栄を、世界の代わりに人種を。幻滅と経験論はまさにこの点にあるだろう。そしてこの狭隘化を介して、連帯のための集合的なエゴイズム、メシアニズムのための物質的な嗜好といった戯画された寛容さの姿が、真の意味をあらわにするだろう。

この点は詳細に検討してみるに値する。シャフトが応答したヘルマン・ギンベルの発表の内に、「現在の人間」のもっとも優れた表象の一つが見出される。その表象とは、もはや信仰ではなく意志であり、

に永遠に身を捧げる、友愛に満ちたキリスト教の生活を唯一変わらぬものとして希望しつつも、学説を変えようとするあらゆる者たちが、このノイヴェルクに結び合わせられる。体系性をより望む精神が形を取ろうとするや否や、そうした精神はノイヴェルクを離れ、自分たちのセクトや党を設立することになる。カール・バルトも最初はノイヴェルクと協働していたし、ベルノイヒナーの人々も、宗教的社会学者やキリスト教的マルクス主義者（彼らの終末論は階級の弁証法を用い、またそれを啓蒙しようとした）同様、そこから出発した。最後に形成された分派は、オットー・ピパー教授の「福音主義の若者たち」であった。それは、聖職者のあまりに行政的で鈍重な機構を揺り動かそうと欲し、また、教会内部の活動にとつても外に向けての普及にとつても等しく有害であった、「官吏牧師」という失効済みの考えを終わらせようと欲する、そうした左派の若き牧師たちの同盟である。

しかし原細胞であるノイヴェルクは、予見不可能な未来への配慮と、様々な仕方でなされる要求の一つである現在そのものへの配慮によつて、こうしたすべての運動から区別されたものであり続けようとしている。この注目すべき「開かれ」は、そして、対立する諸傾向を雑誌の中で共感して迎え入れるこの抱擁性は、人と事物すべて——それらは知的な体系性によつて抑制されている——に共通する、隠れたる神に関する青年運動の考え方の内に、起源をまさに有しているように見える。ヴィッツェンハウゼンにおけるペンテコステの最近の集まりは、このことをかなりはっきりと示している。そこではノイヴェルクの人々に、幾つかのワンダーフォーゲルが、さらに、生じてきた世代

の独自性を主張しようと努めるクラブたちが合流したのである。今日の人間に関するヘルマン・ギューンベルの分析は、昨日までの人間に今日の人間たちを理解できる希望をほとんど託さず、さらには、こうした今日の人間を兄弟と認めるキリスト教徒にさえ、希望を託さなかった。ヘルマン・シャフトの応答は、問題となった統一へ向けて入り込む努力として興味深いものであった。安易な和解を放棄しつつも、彼の応答は（「世代間の」差異に取り組み、「両世代において」変わらぬ内容を浮かび上がらせるものとしてこの差異を用いた。だが、常に問い直されるこうした内容を把握することは、部分的なもの以外では決してなく、かくしてこうした見かけ上の失敗によつて、定式化を欠いたままに留まらざるをえない発想——そうした発想を鈍磨した体系は常に待ち焦がれるものだ——を和らげようとする。もし基底となる学説があるとしたら、それはパウル・ティリッヒのものだろう。それは、人間の脅かされた実存を限界づけ、不安にし、また惹き付ける彼岸の哲学であり、その彼岸がまさしく彼方にある——とりわけ人間から隔てられている——以上、それについて人は何も言うことはできないが、しかしその彼岸は、精神生活（精神生活）と自然の内在において、またキリスト教史の超越において顕現するのである。とはいえ、これ（ティリッヒの学説）は既にあまりにはつきりさせ過ぎているかもしれない。否定ばかりする教条主義の危険を冒しているかもしれない。ノイヴェルクの核心は、こうした学説の前提たる生きられた発想や、人間的かつ宇宙的な友愛に好んで留まろうとするところにある。シャフトがホーエン・マイスナーで擁護していたこの友愛——つまり奉仕への意志と世界へ

「クイックボルンの魂はバルジファルである」と彼は一九二四年に書いている。ゲルマン化されたこのラテン語〔バルジファル〕^{quick}以上に、青年運動の精神的源泉を理解させてくれるものはない。そして青年運動はこのバルジファルにおいて存続するのだ。なぜなら、青年運動はそこで安定したダイナミズムというパラドックスを実現するからである。そのダイナミズムは一方で、外的世界と妥協し、また信心のブルジョワ化した実践と妥協することで急速に固定化してしまつた、世俗的な宗教生活の機械化に反対する――より積極的に神秘へ参与することに向けて努力するのである。それは他方で、ローマの秩序を備えた夢想と個人主義という古きゲルマン的靈性をも自分のものにしようとする。それは、世代ごとに変化する要求と共に絶えず仕切り直される同化であり、新たな問題設定の点検と会合を引き受ける同化である。だがこの青年運動は現実に対して反抗することはない。それは、型にはまつた情動的な議論といったものによつて、現実を調整するアナロジーを世俗的な平面上で保証しようとするのみである。この青年運動はなおしばらく、世俗的なドイツのカトリシズムにとつて、新鮮さと生の源泉であり続けるだろう。

ノイヴェルク

プロテスタントの側には、「クイックボルン」とはつきり類比できないものはない。確固とした枠組みを欠いているからであるが、同じ役割を少しばかり演じるものは存在する。その役割とは学説によつては定められない流れであり、セクトも、さらには党も作ろうとしないが

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

故に、有効性をひと際もつだろう流れである。努力はそこでは、不侵の教会と俗世とを接合しようとする上から下へと単に向けられるのではなく、頭の固い聖職者と〔教会から〕まるで離れてしまつている民衆、双方に向けてなされるのである。それがノイヴェルクの、ヘルマン・シャフトの、エミール・ブルムの運動である。それはドイツでも〔ローテンフェルスとは〕別の片隅、レーン山地のシュリヒテルンで起つた。栗林の立ち並ぶ高所にあり、視界をさえぎる物のない、明るい地平が広がるそこは、ハベルト農場という小さいコロニーである。まさにその場所で、平和主義の若き牧師ヘルマン・シャフトは、高校の教師ゲオルグ・フレミング及びエミール・ブルムと一九二二年に出会つた。ブルムは、崩壊しようといっていたキリスト教共産主義の設置場所であるハベルト農場に、フォルケハイスコーレを設置しようとやつて来ていた。フォルケハイスコーレとは、寄宿舎付きの民衆的な大学であり、今日なお盛んに活動している。今夏も失業した三〇人ほどの若者が、兄弟的な親密さで教師と結ばれながら、そこでプラトンを読んでいた。

ノイヴェルクは若者たちの同盟^{バンド}ではない。それは組織を欠いた、ある精神であり、同じことを考える者たちが集う雑誌のことである。その綱領を定式化することはまさに困難なこととなる。ベルノイヒナーやケンゲナーと異なり、ノイヴェルクは、境界を少なくとも引いてしまふような否定をおこなうことさえないのだから。そしておそらくはこの故に、ノイヴェルクは今日、プロテスタンティスムにおける青年運動を真に代表する唯一のものであり続けているのである。俗世

サの使用を各所に少しは広めたのだが、それらは若者にとつてきわめて本質的になつてしまつたために、幾つかの地域ではクイックボルト・ミサと呼ばれている。毎月かなりの数のグループで、この式典は更新されるのだが、そのイマージュは実際、運動の最良の象徴であるかもしれない。フライブルクでそうであるように、離れたところにある、墓地の真ん中に置かれた小さな礼拝堂で開かれ、礼拝堂の開いた窓からは薔薇と茨が入り込んでいる。遠くには噴水が見え、近くからはラテン語の唱句が規則的に流れ聞こえてくる。鳴り響くリズムの滑らかなうねりは、祭壇の後ろにいる司祭から、古くからの慣習に従つて、跪く若者たちの重々しい一団へと届くのだ。

だがローテンフェルスでこそ、こうしたことを見るべきである。それは、彼らが十年來所持している隠れ家、そして、その隠れ家の中でも高所にある部屋の中でなされる。樹で覆われた二本の反つたナイフの間に、マインの明るく落ち着いた感じのクロスが飾られ、眼下には木と荒壁土で囲まれた小さな村が広がる。そこに止まつたままの渡し舟の軋む音が聞こえ、人里離れた古いフランコニア地方のごわごわした粘土で作られた、赤みを帯びた広い道の不恰好なうねりが見える。扉にはブナの木と肥沃なトウモロコシ畑が刻まれ、また家には、黒い木で作られた立方体状の台座が据えられた真っ白な騎士室と、幾何学的な礼拝堂がある。そして最後に司祭として控えるのが、ロマーノ・グアルデーニ^{xxxx}である。

彼はクイックボルトのただ一人のリーダーという訳ではないが、ローテンフェルス王国の支配者であり、そのことによつて運動に本質

的な仕方では霊感を与えている。雑誌『盾の同志』はここ最近、ドストエフスキーにおける宗教的存在に関する彼の研究を載せている。それはザルトツブルクのカトリック・セミナーで彼が講義の主題としたものだが、それを聞くと、彼にとつての偉人、アリオシャ・カラマーゾフに彼自身を比較せざるを得ない。もつともそれは、減ることのない「徹底した誠実さ」をもつ聖職者としてのアリオシャである。エル・グレコの相貌と秘めた魅力を湛えた彼は、その確固として奥深い教育においてはいささかも熱狂することがない。いやむしろ、そこにはそもそも教育などないのだ。あるのは彼の全人格の直接的な活動であり、真理に永遠に身を捧げようとし、思いやりから他者を躊躇なく受け取りまた与えようとする、そうした一つの魂の真摯さの直接的な活動である。彼がアリオシャについて述べたように、「彼は判断するのではない、その存在全体で彼は判断だったので」。判断と規則。彼は今年、ローテンフェルスで沈黙について語つた。それは、無限の度合をもつ内なるざわめきを下つていくための、沈黙に関する人間の学科であり、平静で衰えることのない従属を（精神）に開くための宗教的学科である。そして彼が軽い足取りで姿を消すと、彼の定めたイマージュが聴衆を長い観想の内へ一つにする。被造物としての人間である「我は神より来たれり」、あるいは、夜の中庭で鐘の呼び音が鳴るまで続くペンテコステの待機。そのとき、礼拝堂へ向けて、そして次のような終禱の暗く静かな詩節へ向けて、無言で瞑想をしながら歩いていくのだ。「いと高き御者に守られてすむ者、天にまします主の保護のもとにある者よ。」^{xxxx}

力があるのではなく（リーダーたちが進んで主張しているように、この同盟は大衆運動であろうとはしていない）、成員の上に同盟が残す刻印の活力である。成員たちは年をとつても、刊行物と優れた雑誌『盾の同志』の威光によつて、そして若者たちとカトリック大学のエリートに対する活動によつて、同盟に結び付けられたままである。クイックボルンは真の青年運動であり、例えば新ドイツ〔同盟〕のイエズス会的な発想でなされた大きな組織化とは異なっている。新ドイツでは、若者たちによる現在の多くの同盟と同様、運動の獲得物の大半と最良の部分には保存されたものの、それらは古典的な区別に従つた、自律性あるいは少なくとも過去の精神を欠いた青年指導jugendleitungなのである。

この精神をカトリシズムの中で順応させようとするには、ニーチェ主義と異教的な熱狂——それは悪用をいつも避けることはできない——が支配していた戦前においては、パラドックスがあつた。実のところ、聖職者による監視は、教会の責任ある代表者が指導委員会に絶えず存在することによつて、決して欠けていた訳ではなかつた。しかし常にリーダーの中には、他の同盟と結びついた非聖職者がいた。自己教育と共同生活の有効な実現化を伴つた〔監視からの〕こうした独立に加えて、原的な生の様式、つまり罪ある生の様式を未規定さの中で——人間の欠陥は、教会法規では規定されない部分を生の様式に残す——自然のおかげで発見しようとする要求もまた存在していた。

5 順応させるというよりはむしろ使用してしたのである。ゲアルデーニの言葉によれば、「この歴史上の青年運動は、キリストへと導いていくことが問題となる自然の一断片として捉えられた」。

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」（翻訳と解題）

ステンドグラスを礼拝堂に置くために、モデルとなる聖職者の加護を人は祈つた。その聖職者とは例えば聖フランシスコ、そして特に、マルブルクとアイゼナハの慈悲深い女王であり、ドイツの偉大なる聖人でもあるチューリンゲンのエリーザベトである。また感覚的なものへの熱望は、典礼運動をおこなうベネディクト派によつて方向を定められた。

学識と聖職に関わるこうした広大な仕事に関して、クイックボルンは普及を受け持つ貴重な機関として現れた（これらの仕事は、ドイツではボイロン修道会によつて、とりわけマリア・ラーハ修道院によつてなされ、この修道院は典礼用の宝物を使用し、理解するという現在の仕事を、教会に与えようと努力した）。戦後開かれた二回目の会議にして既に、（マリア・ラーハの）P・ウイリブロード・バルマンは運動に、当時まだ欠けていた儀礼的な要素を与えようとした。彼は報告で次のように書いていっている。「典礼とロマン主義は」対立するのではなく、補完し合うのであつて、「ロマン主義はドイツの魂であり、典礼は古来の調整をおこなう」。「クイックボルンは知性主義に抗して心の権利を再興しようとするのだから、典礼運動がクイックボルンへと向かつたのは正当であつた」。「具体的なものへの感覚だけでなく、行動の意志と共同生活という青年運動の他の二つの特徴も、クイックボルンのうちに然るべき場所を見出すことができたのである」。

これらの特徴もまた毎朝晩の祈りの内に象徴をもち、その祈りの際
に人は、古き驚嘆すべきテキストを、取り分けて対話形式のミサ
(missae recitatae)を蘇らせた。ベネディクト会士たちがこうしたミ

一九〇五年から一九一二年の間に生まれた新しい世代の心理学は容易ではない。だが内在的な理由（理由）をおそらくは探究しなければならぬのではないか。つまり、運動の歴史それ自体が十分な説明を提供する。運動の失敗に対してと同様、その成功に対しても。運動の失敗、それは新たな秩序を創り出す運動の場合である。精神生活を中心としてそこに事物を従わせる方法に、現実には屈することなく耐えてしまうのだ、ということが示された。今日、青年が従うのは事物であり、その構造や法則である。自然主義的なレアリスムが技術的なそれへと移行した結果、問題毎に、あるいは明確な解決毎に任命されるグループは別々になった。

運動の成功は反抗としてある。それは、運動が戦ってきた文化を消し去るための反抗というだけでなく、青年としての文化解放のための反抗でもあった。つまり「青年の」自律性承認のための反抗であり、今後この点にははや疑問視されることはあるまい。ドイツは今日、教育改革にかける努力では先頭に立っている。プロイセンの前教育相ゼーフェリンクによる改革において公的な認可を受けた私立校で、あらゆる実験が個別になされているのだ。そして、このように改革の先頭に立っていることは、その多くを学生運動に負っている。学生運動こそが、大人の縮尺版ではない、固有の法則を備えた独立したリアリティとしての青年という概念をドイツに移入したのである。「労働の共有」のしきたりを確立し、さらに一般的には、若者の生活に、自然の中の生活であるワンデルンに新たな様式を与えたのも、学生運動である。民族性において決定的な仕方で獲得されたもの、引き返すこ

とのできない道がそこには存在する。しかしそれこそ伝統が確立してしまつては、もはや学生運動でも革命でもない。年長者が森の近辺に立て札を打ち付け、大臣が学校での自由をまとめあげているのだ。

初期の運動精神がまだ息づいている場所、それは、あるいは固有の構成によつて、またあるいは諸々の状況によつて、自由な動きを運動精神に全面的に残して現実が過度に安定化した、そうした場所に限られる。だがそれでも、教会や小さな政党のような社会的存在の生へと併合されることで、運動精神はそれ固有の表出様態をしばしば欠くとはいえ、やはり存続している。それは、運動に許された満足感と限界——限界が存在するといふまさにそのことで運動の存続に拠点を与えられる——との間で起こる一種の平衡状態によつてである。カトリシスムにおけるその例がクイックボルンであり、プロテスタントイシスムにおける例がノイヴェルクである。

クイックボルン 湧泉

カトリック教会は運動の独立の気運にも、その汎神論的な関心にも元々抗つていたと見ることできる。だが一九一〇年にして既に、教会に従いながらもワンダーフォーゲルの一部の慣習を真似ようとした若いカトリック教徒たちの孤立したグループが幾つか現れた。そして一九一三年に、「生の泉」を表すクイックボルン同盟が設立されたのである。この同盟は急速に成長し、およそ五千人を含むまでになっている。戦争来、幾つかの危機にもかかわらず同盟は絶えず発展し、一年前の直近の困難から脱して活力に満ちている。信者の数によつて活

度によって、戦争、教会、ブルジョワ道德の問題をしばしば根本的に考察する際、内密なつながりを感じるのである。こういった問題を彼らは年次大会で議論し、外部にもよく知られた雑誌『来たるべき教会』にその報告を載せている。この雑誌のタイトルはそれだけで示唆的だ。彼らは待っている——「新たな宗教の徴は至るところにある」——但し東洋を向いて。「古代インドのいしえの見者による論考の中に、インドーゲルマン的な（ヴィジョン）と信仰が新たに現れるのであって、これらはプラトンのうちにもドイツ的な神秘主義者のうちにも生きている精神と、密接につながっているのである。」⁴

社会運動

社会問題に直接関わる団体については、その歴史はより平凡で概ね終わりを迎えている。実現したいという焦慮は一九一九年には大きなもので、細々とした種々の試みが日の目を見た。こうした試みは、一九世紀半ばのフランスにおけるサン・シモン主義やフーリエ主義の開花との親近性をこの時代に何らかもつようなユートピア主義へと四散していった。生活の改善、土地の集中的な開拓、無政府共産主義、これらと同じような主題が、実現する幸運にほとんど恵まれないまま探し出されていった。困難な時代だったということもあり、ほとんど全ての小さな農業コロニーがインフレに続く危機の中で消えていった。そうしたコロニーの一つ、ヘッセン州シュリュヒテルン近くのハ

4 Prof. Hauer, « Die religiöse Krise der Gegenwart und die Kirche » (現在の宗教的危機と教会) », *Kommende Gemeinde*, oct. 1930.

ベルト農場の歴史は多くのものに共通しているように思える。何人かの熱心な運動家が農地を購入し、誰にでも門戸を開いた後で、共通の帳簿を作り、現実離れた労働をおこなう——朝、食事を摂りながら、どの畑へと日中仕事しに行くかを多数決で決めるのだ。決定はどんなものであれ全て、このようにして共通のものとなり、仕事それ自体さえ、最初は固定した割り振りをもたない。そこから、おそらくはスグリによると思われる優れた畑の消失や、過度な世話の犠牲となった不幸な馬の死、といったことが生じた。それでも今日なお幾つかの試みは残っており、例えばザンエルツのエバーハート・アーノルトのものが挙げられる。そこでは全面的な共産制下で八〇人が暮らし、初期キリスト教の熱狂がある。ベルリンではジグムント・シュルツェ教授が、知的教養と道徳教育の自律した意志を備えた労働者と学生からなる共同体を実現しようとした——もつとも経済的な基盤を欠いていたが。各人の糧を得るための労働とは混じり合わない活動を連帯して共に行うこと、そのことによって創り出された集合的意味は、注目すべき成果を十分産み出し、その成果は今なおドイツ全土からの訪問者を惹き付けている。この地域における、これがほとんど理論化されていない最良の青年運動であるが、リーダーたちの精神生活の真摯さと実在が深みと持続を伴った活動を可能にしたのである。

現在の青年たち

しかしながらこうした存続は例外的なものである。真の青年運動は、今日ますます死んでしまった。その原因については様々な意見がある。

機は式典で具象化され、しばしば教義さえ用いられる。まさにこのようにして、法で定められた教会の外部に、諸々のセクトが設立されたのである。その中にはルドルフ・シュタイナー（ドイツ人）の人智学や、彼の弟子フリードリヒ・リッテルマイヤーのキリスト者共同体がある。リッテルマイヤーはシュツツトガルトの若き牧師であったが、やがてプロテスタンティスムから離れ、それでもキリスト教徒であり続けようとして、今なおノエルやイースターといった教会の祝日を式典で祝っている。その式典では、実のところ、福音書から来ているものはほぼ全くない。だが彼は権威ある聖職者の人々との関係を保持していたのであり、プロテスタンティスムの内部で最も正統な同盟（プロテ）であるベルノイヒナーは、彼の改革の幾つかを共感と共に用いるのだと主張している。

ベルノイヒナー同盟（プロテ）は、保守的な神学者ヴィルヘルム・ステーリン教授（ミュンスター）によって率いられている。現在における彼の影響力は、そのパンフレットの普及によっても、ほぼもっぱら司牧的なその創作によっても、また若者の間でかなり拡大したグループである B. J.（ドイツ青年協会同盟（プロテ））との緊密なその結びつきによっても、無視されるべきではない。古き青年運動の精神——それはリーダーたちを介して運動から直接生じるもの——はそこでは、こうした東方の知恵のもつ道理を組み込むことに専心している。キリスト者共同体のように人間聖化式は行わないが、新しい典礼は効力をもち、そこではローマのミサ典書と聖務日課書が感覚的な自然への讃歌と交互に現れる。これは、無機物の世界と生物の世界を贖罪の真摯さと喜びに結びつけるための努力である。日々のリズム、太陽の相が宗教的な意味

をもち、祝祭を引き起こすこともある——このことはそもそも、特に秋分や春分においてはほぼ全ての青年団体の慣例であったが、それと同様である。結局、身体が崇拜と再生の器官として復権するのだ。導かれつつ共同の「瞑想」が実行される——但し、これらの青年団体は聖職者の観点からすると革命的であるにはほど遠いため、瞑想もかなり慎重に実行された。ここでは、物質的なイメージがその形と感性的な側面でもって他の精神的な一連のイメージの出発点になり、そうしたイメージたちがある種の神秘的状態を、宗教的リアリティの感じられる現前をもたらしことになるのである。

他の（「外向きの態度をとらない」）グループはまずもってそれ自身の中で、個人的な反省を通して、またとりわけ共同体における考えや生の交換を通して、真理がそれなくしては伝えられないような「恩寵状態」を創り出すことに専念する。このようなグループの例として、ハウアー教授（プロテ）（チュービンゲン）率いるケンゲナー同盟がある。それは聖書クラブの正統派の環境の中で元々は募集され、今日でもなお、とりわけヴェルテンベルクの若い牧師の相当数を含んでいる。この同盟は定まった綱領を持たず、ナチスから独立した共産主義者まで、きわめて種々雑多な成員からなる。ハウアー教授自身、かつては牧師であったが現在では東洋研究者であり、公的な教会とは手を切りつつも、自ら言うところでは正統派の弟子達と完全に交流している。彼らを結びつけているもの、それは彼らが定義を拒む精神的な態度であり、この態度のゆえにヒンドゥーの学派に関心を抱いたのだと主張している。彼らはきわめて多様な解決を褒めそやしもするのだが、この精神的態

いものは何もあるまい。すなわち、「第一に」自分があるということ
をただ考えようとするだけですぐさま棄却される、そうした被造物の
虚無であり、「第二に」キリストの共同体の外にいるどんな存在も分
かちもつ原罪（外にいるにもかかわらずキリストはこうした存在にも
不可欠である）であり、最後に哀れな戦う教会——教会はその「苦境」³、
本質的な苦悩によって、体系化することができず、個別の状況の具体
的な要求においてただ受け取ることしかできない神の言葉を告知する
こと以外のどんな仕事もできず、またどんな実在性もたない——で
ある。そして、秘められた情動的な親近性を考慮するならば、これら
三つほど、直近の過去と手を切ると同時に、刷新の仕事への完全なる
献身へと自己を従属させることを決意する魂にとって、身近なもの
何もあるまい。

しかしバルトとゴッタルテンの神学は険しい主人でもある。些かの
分有も認めないのだ。高位聖職者に対するその開かれた戦いも、宗教
的なものも含め一切のナシヨナリズムに対する、断固とした、そして
最近さらに一新されたその放棄も、そして右派及び左派との何らかの
同盟も、一握りのエリートに対してしか持続的な仕方で行動を許さ
ないのである。そもそも、この神学のかなり大胆な知的アプローチは、
一方で多くの人々を落胆させ、他方で相当数の弟子たちを、一種のキ
エティスムへと、またはそこまでいかなくとも実践における一種の受
動性へと導くような、解釈の誤りを許したのである。これらは作り上
3 『時の間』（一九三二）に収められたバルトの二つの講演「福音教会の苦境」
及び「貧しきラザロ」を参照せよ。

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」（翻訳と解題）

げようとうずうずしている若いメンバーにとっては言語道断なこと
であった。その結果、もし現代の宗教思想のほぼ全体が多かれ少なか
れ戦うためであるにせよ——バルト主義によって規定されており、ま
た、福音教会における青年運動の中で最良のものもそれに賛同してい
たのだとしても、大衆はそれほどラディカルでない刷新を好んでいた。
そして、しばしば（バルト主義の）定式の幾つかを採用しつつも、キ
ルケゴールの中に大衆がそもそも直接見出すことのできた教育上の厳
しさは、東方的な神秘の約束へと進んで向けられていたのである。

これが「西洋の没落」において一般に人を引き付けるものであった。
決まり文句の一つがインドから来ているか、その文句が支持者を得る
ようにインド由来を主張するかすれば十分であったのだ。ここに特に
見て取れるしるしは、ドイツがこの時代、かつて今も一種の代償的
な心理状態へと逃避しようとしていた、ということである。実際、企
てられた宗教的な適応は、明確に定義されないインドの幾つかの要素
——例えば未知のものを前にした畏敬や、（時間の外側でなされるやも
しれぬ）発見されるべき真理についての教説——を受け取ることに限
られていた。この教説の役割は、今現在の意図を制限し、神とさらに
は宇宙の予見不可能な秩序に「開かれてあること」（*offensein*）とい
う一種の待機を、信者に根本的な態度として与えることにある。この
態度は、神は常に生ける過去の中で語るとする弁証法神学のものとは
全く異なったものである。但し、こうした態度はグループごとにきわ
めて異なった形を取っている。

幾つかのグループでは、この態度は外へ向けて表れる。例えば、待

理主義は、どんなロマン主義との共同作業をさえ許さないほどにあまりに厳密であつたからであり、この点は軽はずみな何人かの弟子が見せた失望によつて示されている。しかしこの反動は青年たちに、自分たちの批判は「フッサールの哲学によつて」基礎付けられた、という感覚を少なくとも提供することにはなつたのである。現実には、それは二つの解決へと分裂せざるをえなかつた。一方は、ハルナック派ハルナック派の譲歩が気の抜けたものにしてしまつた厳密なキリスト教への回帰、他方は、異国的な要素を認めること、すなわちいささか混乱した様態で戦後押し寄せてきた東方的な知恵すべての認可——すなわち「カール・バルトの」弁証法神学と「シユタイナーの」人智学の二つである。

バルトバルトの革命は、青年運動へと一体化されるには、行動面ではあまりに豊かであり、学説面ではあまりに独創的であつた。それはそもそも青年運動に明白に対立していたのである。バルト自身の言葉によれば、彼の革命は青年運動の解体を表している。しかしそれは青年運動の遺産を受け取つてもいるのだ。その遺産相続は単に個人的なものというだけではない。というのも、弁証法神学の大半を熱狂的に選び取つたすべての若き牧師が実のところ青年運動によつて育まれていたからであり、その遺産相続はまた、十分仔細に眺めるなら感情的な素材に対するものでもある。すなわち、既存の教会及び信心に対する批判であるもの、その一切の直接的継承である。バルトとその弟子たちは知性主義の拒否のために準備の整つた場所を見出したのだ。その拒否はあまりに絶対的なものだったために、歴史あるいはキリスト教の教義へ意味を与えるというただそれだけのことでも、そして、「解釈

だ」と思う、そうした単なる思いなしだけでも、ゴーガルテンゴーガルテンによれば、真なる信仰と相容れなくなるのである。批判的合理主義も啓蒙主義の哲学も、真剣に攻撃される必要はそれまでほとんどなかつた。新たなもの、根本的な悲観主義、そして人間が免れることのできない罪の帝国のこの熱狂、これらは自然や過去に戻ることで再生できる可能性を常に素朴に信じていた（過去の）青年運動にとつてはまったく縁のない概念であつたが、こうした概念に対してさえ青年運動がうまくいった本質的な要因は、初期の少々無邪気な楽天主義が、少なくともエリートにとつては緩んだことであつたように思われる。戦線に戻つてさえ、青年たちは己の「使命」をまだ信じていることができたし、真正なる良き意志のみを、そして相当単純な精神的衛生のみを気にかけることができた。幻滅はじきにやつてきた。きわめて優れた人の場合にはより早く。彼らはきわめて自然にこれまでと反対の見解へと転向した。つまり、人間本性の根本的な墮落は明らかであり、この世に神の国を打ち建てることなど拒否されているのであつて、唯一の救いは神の見通し難い意志に完全に従属することにある、という見解である。

歴史のこの新たな弁証法は、安堵をもたらすヘーゲル主義の和解とは無縁であり、我の措定と汝の反措定を、現在と過去を、いささかも総合することなく対立させる。これは、現在を過去に容赦なく従属させるため、受肉した（御言葉）の要求のもとでの、「私」の無化のためなのである。次の三つを主張することより以上に、青年の感傷的な終末論やロマン的自然主義、また共同体への彼らの絶対的信仰から遠

容を規定し、反省するよう迫ってくる必要性なのである。一九二〇年代の青年運動におけるこうした不安げな祖国愛を、第一期の運動も第二期の運動も決して知らなかった。そして、この祖国愛は一種の中世的夢想の内に、また、再興する必要がある、かつて実現した一種の神秘的帝国の内に、所在をもつことができると考えたため、祖国愛は、それを生きた世代だけでなく、今日浮上してきた諸々の世代にも、無視がたい刻印をしるしていったのである。

宗教運動

同種の混乱と、同じく率直な刷新の意志は、他ならぬ宗教の領域の内にも見出される。戦前の青年運動は、信仰の問題にほとんど配慮していなかった。幾つかのグループにおいては概して非キリスト教的な信仰、但し攻撃的というよりもむしろ喧騒に満ちた、表面上異教的な信仰を伴っていたが、戦前の青年運動におけるそうした雰囲気は、プロテスタントの伝統的な思考様式によっていまだ規定されていたのである。宗教的復興の仕事その様式の中で学ぶことは、さらにまた容易であった。そもそも、「復興を学ぶ」必要性が明白なものとなるのは、そのようなところでのみなのだ。中道派の宣伝家が注意を促したように、司教座は、一九一八年の騒乱（「ドイツ革命」）に対してドイツで唯一抵抗したところである。ルターの座が損なわれたのだ。それはまず、「ドイツ帝国においては」国家の君主がほとんど至るところで同時に教会の長であったからである。例えばプロイセンの王は大公であり、また古き祭式の牧師にとっては地上における神の代理人

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」（翻訳と解題）

でもあった。ヴァイマル憲法が定めた半分離^{部分}の体制は、カトリシスムよりもプロテスタントを確かに揺り動かした。一九一九年における教会の支出を示す数字——おそらくそこに、課税をおそれるものを考慮する必要があるとしても——は、このことを示すのに十分であろう。

混乱の原因はしかしながらもっと根本的なものであった。厳格な教義と精神的確実さによって世界の均衡を保とうとする生真面目な敬虔派にとっても、進歩と現代文化の友たる自足したリベリスムにとっても、戦争はその恥辱と失敗とによって大いなる破綻であった。青年たちが希望なき未来へ向けて「回帰する道」を歩んだのは、牧師に対する苦い悔恨に満たされたことであつた。結局のところ、彼らは既に戦争の前から、当時支配的だった、再考の望まれる信心から自らを断ち切るべき、という習慣を抜き難くもっていたのである。具体的なもの、つまり感性的事物への愛、単に人間的であるだけでなく宇宙的でさえある運命の中にある共同体の感覚、そして時間についての偉大な師であるキルケゴールの表現によれば、「瞬間が決定的な重要性をもつ」ような歴史のリアリスム——これら三つの特徴によって青年たちは根本的にリベリスムと正統派に対立した。これら二つは生ける自然からどちらも距離をとっていたし、また、当時支配的であつた新カント派の個人主義的で観念論的な学説にとつても等しく好都合なものであつた。哲学においては、フッサールの執拗かつ忍耐強い導きのもと、大きな反動が生じた。それは確かに、青年たちに自分たちの信仰を引き延ばすための理由は与えなかつた。というのも、この師の合

み(つまりドイツの神に対して)である」。そして、自由ドイツ青年団の中核で繰り返し(特に一九一八年にO・グレフ³¹によって)主張されたことだが、ドイツにおいて唯一可能な信仰とは「我々の人種を信じること」であった。もつとも、こうした空想事はすべて速やかに消え去り、一九二三年にはなお幾らかの痕跡を残していたものの、今日では、ルーデンドルフと彼のタンネンベルク同盟³²以外にはもはやほとんど残っていない。この団体は、「ゲルマン的天才性のユダヤ的な見せかけ」であるとして、キリスト教とマルクス主義を一薙ぎで退けている。

ドイツ的なキリスト教を基礎づけようとする試みは、より真摯で持続的なものだった。ある者たちはルターを賛美しながら、当時の雰囲気と道徳的要求に合致した悲観的な彼の神学の内に、グリムによって取り集められた伝説の英雄主義と運命論の残響を見出すことができると思っていた。例えばシェイファーは、一九二三年に刊行された『ドイツの神』という大衆から集めた逸話集の内に、そうした残響を見出している。しかしこれは詩人の見方である。ラディカルな者はより首尾一貫しており、宗教改革をそのパウロ的発想のゆえに退け、イマージュと神秘によってキリスト教をゲルマン化した(「神聖ローマ」帝国、及び中世と直接結びついたので)。その際召喚される名前は、ヘーリアント、ヴォルフラム、エックハルト³³である。そこにはある歴史の総体が、連続的な一本の線があるだろう。この線に沿って、キリスト教

2 青年民族同土団の中では、青年ドイツ騎士団には今日なお加入者が存在している。

の内化、民族化が進行したのであり、またルターは、信仰による正当化というユダヤ・ギリシア的な彼の教義によって、この線から排除されることになった。その論証は細部ではまだ脆く、例えば、『人間の慰藉の書』の中に、自己を否定し、隠れたる意志に参入することで苦痛を受け入れる、という勇氣あるペシミズムをどうにか見出すことができるが、いかにすればこの系譜を十字架のヨハネや、さらに進んでフランスのペリユル³⁴にまで延長しないでおくことができるのか。これはまさしく(「ドイツ的なものへの」)併合であろう。いずれにせよ、運動がその重要な時を迎えていた、ということは確かである。宗教書の大きな出版社、イエナにあるデーデリヒス³⁵が、ルターを取り扱わない「ドイツの敬虔」というコレクションを出しているのを、人は果たして見ないだろうか。

宗教改革に回帰すること、中世に回帰すること。どちらの場合も、宗教的モチーフはゲルマニズムに内容を与えようとするためのきっかけに過ぎず、また、基礎づけの目標たる新たな文化に系譜と土台を与えようとするための、きっかけに過ぎなかった。そしてまさにこの点においてこそ、ナショナリズムは今日なお関心を持たれ続けているのだし、また、現行の幾つかの運動へと引き継がれているのである。もつとも、このナショナリズムは、そこに政治的なものを見、また、他の文化への消極的対立程度のものさえ見て取ったとしても、不正確である。価値判断はこうした識別とおそらく混ざり合っているが、しかし(「ナショナリズムにおいて」)追求されている目的はといえば、自らの本質、積極的内容の主張であり、新たなものはいえ、この内

いにせよ、根本的な縦割りの分割といったものが、戦争前の運動に存在しなかつた訳ではない。とはいえ、こうした分割も青年運動という概念には無関係なままに留まっていた。(逆に)戦後のこの第三期は、若者をばらばらの運動へと配分することにその特徴があり、その際、文化、教会、社会という、崩壊しつつある三つの實在性の一つ一つに力点が置かれることになった。これら三つの領域は侵食し合っていたものの、お互いに相入れることのできない解決策を明らかに押し出していた。だが、三つの領域は、争い合うというよりも、多くの場合、無視し合っていたのである。いずれにせよ、これらの領域を分析する目標はこれ以降はつきりとしたものとなる。新しい世代の飛躍である青年期は、源泉でも目的でもあるような原初的な事実^{レアリテ}ではもはやなくなり、予め決められた問題に適用される手段でしかなくなるだろう。そこでは出来合いの文句の間で単に選ぶだけの危険を冒すことになり、戦争前の仕事全体としてそれらの文句に独創的な印を押しつけていたならなお結構、といったものである。

ナショナリスト 国粹主義的運動

ナショナリズムからすると、事情はことさら強烈なものだった。表面上はなおのことそう見えた。ゲルマン民族性を復活させ、それを東洋文化やギリシア・ラテン文化と対立させようとするあらゆる努力は、戦前、青年運動の外にいた人々たちからもたらされた。例えば一九一一年には既に、A・ボーンヌスの著作『キリスト教のゲルマン化に向けて』(イエナ)^註があり、そこではユダヤ的なパウロ神学を一掃し、

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

キリストをゲルマン化することが主張されていた。一九一九年から一九二二年における青年の環境においては、このような理論の流行は明らかに、外的な状況に拠っている。敗戦の落胆に対して、さらなる徹底的な瓦解の脅威に対して、ある人々は人種固有の運命への信を対置しようとしたのだ。こうした落胆や脅威に向かって彼らは、カントとルターは戦いに負けたのだ、と繰り返して語った。彼らはローマ(「カトリック」)へと身を向けて従うどころか、過去の内にさらに遡ることまで自らを救おうと思ったのだ。実際、その遡行にはあらゆる度合いが存在した。例えば、ある人々は端的にキリスト教という弱者の宗教を退け、ヴォータンやイルミンへと回帰することを語った。また他の人々はさらに、エツダというスカンディナヴィアの古き源泉へと、ユツグドラシルの^註コスモスへと遡った。イルミンのアーチの上で分離がなされたのだが、それは善と悪の分離ではなく、臆病者と英雄の分離であった。そして古き伝説の中で彼らが進んで再発見しようとしたものが、根本的な三つ組の考え、すなわち、運命、光のための宇宙的規模の闘い、自己を目的とするエネルギーの英雄主義である。詩人ヴィルヘルム・シェイファー^註によれば、キリスト教は個人を救うために神と世界を揺り動かすのに対し、ゲルマニスムにおいては、個人こそが闘い、巨人たちと神の間の宇宙的規模の戦いの内に入り込むのである。その上、シェイファーはそれほど先まで進まなかつたものの、例えば「捕捉サークル」^註はそのマニフェストにおいて、キリスト教の本質とゲルマンの本質の間の縮減不可能な対立を主張していた。「我々が身を委ねようとするのは、ただ永遠に創造的な神の力能に対しての

一の肯定的なものとなっていた。気楽なワンダーフォーゲルは街に背を向けるだけで事足りりとしていたが、自由ドイツの人々とその同胞たちは「文化〔教養〕」に則った判断に身を任せつつも、その文化を厳しく退けていた。そして、この否定的な側面こそがとりわけ、彼らの運動を特徴付け、またそれにアクチュアルな重要性を付していたのである。彼らの後では引き返すことは不可能となり、「ヴィルヘルム主義」は若者にとつても、さらにはこの世代にとつても、容赦なく糾弾された¹。そして、こうした時代がそれ以降進むことになった方向について言えば、次の二点が重要である。まず一九一三年、グリム童話の風景広がるカッセル近くの小火山ホーエン・マイスナーに、自由ドイツの人々がドイツ青年を招集し、青年の信仰を定めようとしたが、この一大集会²において、明確に平和主義的な傾向が表面化したこと、そして、一九一四年に自由ドイツから皇帝へ向けて平和を祈念した電文が送られたことである。

戦争は大勢を変えなかった——地平が世界から国へと縮小したことを除いては。戦前の青年運動は、愛国的であったとしてもたまたまのことであつたし、あまりに確固とした権力にかかずりあう必要はなかった。そのような力を自惚れて主張すること自体が運動の繊細な感情を妨げることであつたらう。しかし一九一五年にして既に、実存が

1 問題はここでは、調和を乱すことでも、文化的な対立を政治に持ち込むことでもない。多くの若者にとつて、ヴィルヘルム(二世)の気取った姿や、他ならぬその流儀の徹底的な欠如は耐え難いものだった。理想的なドイツ皇帝、大公への忠誠が無傷なまま残っていたのである。フレックスの態度はこのことをはっきり示している。

脅かされているという観念が、危機と共にドイツ人の意識のうちに現れた。この観念のちに様々な仕方³で引き移されながら、ドイツ人の意識をものはや離れるべくもなくなった。危機とこうした観念の一时的な占有は、受け継がれてきた精神的紐帯⁴を愛するよう仕向け、他方で、苦難を被ることで、様々な階級間の共生は、連帯——それは勿論、一国家内に制限されたものだったが——の意味を発展させていった。この時期の青年の中で最良の歴史家の一人であり、排外主義にほとんど疑念を抱きもしないオットー・ピパー教授は最近次のように書いた。「戦争は、我々にドイツを知り、ドイツを愛することを教えてくれた。」ここにあるのは必ずしもナショナリズムではなく、危機に陥る前の彼らの判断よりはるかに制限された課題が幅をきかせるようになった、ということの単なる発見である。その課題とは、新たな人間性をもはや基礎付けることではなく、日々ますます大きくなっていく崩壊の予兆を前に、自分たちの国を救い、建て直すことであつた。

終戦直後

実のところ、この課題はさらにより大きくなったのだ。どんな堅固な要素も消え失せてしまった一九一九年の混沌の広がりにおいては、重要なのは守ることも改めることもなく、新たなものを作ることであつた。戦後最初の数年は第三次の青年運動にとつて、大きな試練の時期であつた。運動が仕事にとりかかり、己の実質から文化〔教養〕を引き出すべきとき。しかし現実を血肉にすることは、その最初の帰結として、運動の統一性を破壊することをもたらした。上下にはな

るのです。」

ヴルヒエは神学部の学生であった。そのため、ワンダーフォーゲルにおいては一般にただ伏在しているに留まる宗教的な色合いが、よりはつきりと現れることになる。ワンダーフォーゲルでは、自然の不可視の神はそれと名指されない。「戦線という」場所において共生は言うまでもないことだが、ヴルヒエはそこで己の使命を果たす。ただの一兵卒として、彼は自分のグループに信頼され、またグループの道徳的指導をおこなった。中尉としては、各人と共に生き、一団の希望を叶え、教育さえ無用としてしまうような、真の精神的リーダーであった。しかし今現在の義務をこのように絶対的に信じつつも、彼は青年期の希望を忘れることはなかった。内なる生に対するあり方自体によつて、忘れないのである。事物や人間に対する態度よりも、このようなあり方においてはるかに、彼はフレックスの一瞥で見通されることになった。「彼の歩みはしなやかな力そのものであり、己に安らい、また頓着しない活気に満ちていた。その歩みは行進にもなるが、驕り高ぶつた行進に陥る危機のときでも、平静で誇り高いものであった。時宜を得れば、この人間の歩みは遊びでもありえたとし、戦いでも、また典礼でもありえた。それは祈りでも喜びでもあった。」この内面のつながりが、ワンダーフォーゲルのうち最良のものが向かう理想であった。すなわち絶えざる自己抑制である。「人間とは克服されるべきものの〔事物〕である。」「冷静さが彼の好んだ言葉だった。彼はその語の内に人間的尊厳の本質を見て取っていた。明晰で落ち着いた安心感が、彼という存在の上に注ぐ光のように常に安楽っていた」――簡

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

明さ。ヴルヒエは大それた言葉を、目立つ色を嫌悪していた。要するに、語のあらゆる意味で「純粹であること」、生の最も困難なこの技法は、自己満足のためでも、道徳的な耽美主義のためでもなく、これが重要なのだが、よりよく仕えるためなのである。進んで仕えるようとすること。心構え。これがワンダーフォーゲルの体系を支える穹窿の要であり、これに加えて教師が任命されることはない。ヴルヒエやフレックスのようなエリートにとつては、態度の獲得、解放闘争は、最初の仕事として果たせばそれで十分であり、後に来る困難を覆い隠すことのできるものだった。しかし大衆は努力を始めるにあたって目的を要求し、理論を必要としていた。そこで一九一〇年にして既に、ワンダーフォーゲルの素朴で澁刺とした形式は次の次元に移行していたのである。

世界観のこの国では、理論は遅れることなく作動した。幾つかの組織が綱領も含めて作られ、その中で最も有名なものが、グスタフ・ヴィネケンの自由ドイツである。そしていささか混乱した時期にあつて、今では歴史的関心しかほとんど惹かないような一つの哲学が丸ごと打ち立てられたのだった。人は特にエロスについて、つまりコスモスの諸部分を動かすギリシア的な生命力について語り、人間的なものに関して言えば、ニーチェが偉大な師であつた。ヴルヒエでさえ、新約聖書やゲーテの文庫本と共に、背囊に『ツァラトゥストラ』を入れていた。相当数の異教徒的な考えやたわいないロマン主義的な象徴、ただそれだけが既存の文明への心痛む批判の後で据えられるべき唯

ンの「クアフルステンデム通りはなおとどめている——」によってであり、生徒を大人の侮蔑的ミニチュアである罪人として扱う、拙速で喜びを欠いた教育によってであり、ヴィルヘルム文化の思い上がりに浸されたこうした悲しみ全体によってであった。彼ら渡り鳥たちはまですシュプレーヴァルトへ、やがてドイツ全土、すなわちマイン、バイエルン、シュヴァーベン、ジュラ山脈、シュヴァルツヴァルトへと羽ばたいていった。この出立は、リーダーも目的も不在の小さなグループによって、旅の詳細な計画もなければ到着も制限もない、単なる散歩以上の何かである、翻訳し難い「ワンデルン」のためになされた。彼らの一人が語ったところでは、一度、ドナウ川を辿りながら、反目し合うこともなく黒海まで至ったことがあった。

明確な綱領ではなく、むしろ情動的なつながりを。すなわち自然への愛、共同体の感覚、漠然としたメシアニスム——これら三つがワンダーフォーゲルの特徴であって、それらは戦争に至るまでなお保持されていた。戦時中は、これらの特徴は若者の関心をもはやそれほど惹かなくなっていたが、小著ではあるものの、ドイツの戦いについてのおそらくは最良の書、ヴァルター・フレックスの『二つの世界の間のワンデラー』⁶が、これらに関して確かな証言をしている。一人の死者フレックス中尉によって書かれた、もう一人の死者エルンスト・ヴルヒエ中尉の物語であり、二人ともロシアの前線で二年の間を置いて倒れた。過酷な戦闘に先立つ第一部は、ロシアの鉄条網を背にしつつも、アウグストヴォの松並木の間を行くワンダーフォーゲルの喜びへの讃歌となっている。

野生の雁たちが空に灰色の三角形を描く中、何人かの兵士は前線を離れて士官学校へ向かい、秋晴れの下、自由に歩く喜びを見出す。「ヴルヒエ、君はワンダーフォーゲル（渡り鳥）かい。」フレックスは隣を歩きながらこう尋ねた。「ここにおいて私は彼の心をもっとも惹く生の事柄に触れていた。ドイツの未来の栄光全体と救済は、彼にはワンダーフォーゲルから来ているように思えたのだ。そして、この明るく純粹な希望を体現する彼のことを考えると、私には彼が正しいように思えた。」彼は事物を前にして希望を体現していたのだ。「駐屯地で送る退屈な生活の最中、私たちは日曜日朝に集まり、河や山、森、雲などについて話したのだった。」アウグストヴォの白く輝く湖の近くで休みながら、彼らはフレックスの誕生日を祝った。歌やワインと共にではなく、「彼のやりかたで、つまり太陽と森と共に、そして蘇っては息を引き取るうとする太古の言葉の、永遠の響きと共に。武器も雲もないこの六月六日という一日は、彼の心から私の心へ届けられた真の贈り物であった。」薄明の中、昇りゆく太陽に照らされた若き神々のように裸のまま、彼らは冷水に揃って身を浸し、松の赤い幹の間で蒼蠅が遊びまわるのを目にした。夕方、一匹の鶯が彼らの上空を旋回する頃になると、ヴルヒエは起き上がり、瘦身に混じり気のないまま、指の間で夕焼けを捉えて、ダビデの詩篇を唱えた。「主よ、我が神よ、汝は素晴らしく偉大で、美しく、麗々しい装いをしておられます。光を身にまといながら、空をテントのごとく広げておられるのです。…主はご自身の仕事を楽しみ、地を眺めておられます。…私は人生の続く限り、〈永遠〉を歌うことにします。…私は主にあつて喜びを感じ

ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」(翻訳と解題)

中村 大介

【翻訳】

トーマス・マンはこの夏、リユーベックのギムナジウムで演説をおこなった際、次のように述べた。「青年運動は真の道徳革命であったし、我々の慣習を外からも内からも転覆した。それはドイツの相貌を変えた主要な力の一つであった。」その歴史は今日閉ざされ、その目的は果たされた。しかし一般的な浸透とでも言うべきものは残っている。それは、その運動に加わっていた、今では大人となった世代全体への浸透であり、さらには、この運動なくしては理解するのが不可能であるような、宗教的または政治的な幾つかの潮流の独自の歩みに対する浸透でもある。つまり、現在の若者が見かけ上ひどく対立し合っているとしても、その下にはこうした自明な出発点が存在するのであって、ドイツでもこのことに注意を向けようとする人はいない。だが、過激な色彩を備えた諸々の大きな運動——その色彩の心理学は、安直に過ぎる絵模様には収まりきらない——を、それらの適切な場所に位置付けようとするならば、この出発点を認識することは重要である。

起源——ワンダーフォーゲルと自由ドイツ

青年運動についての歴史家は総じて、運動の展開に三つの相を大

きく区別する。その展開は今世紀初頭のほぼ全体に互り、最初の二つの相について言えば、実のところそれらは戦争(第一次世界大戦)の終わる頃まで相互に重なり合っていた。第一の相がより素朴なワンダーフォーゲルであり、批判的で理論的な諸運動がこれに続き、最後に戦後の相が来る。第三の相は、青年グループとしては旧来の組織が大部分消滅する一九二五年もしくは一九二六年頃まで続いた。ワンダーフォーゲル、すなわち渡り鳥の形式は最も深刺として、明確な綱領を欠くものであったが、最も粘り強い生を保ち、他の形式によって副次的な水準へと後に格下げされたものの、近年まで存続していた。今日でも雑誌の内に、白馬ホテルのチロル風の装飾とフランツ・ヨーゼフ一世の横顔像の間で、一本のギターを囲んだ小さなグループが鮮やかな色のシャツを着ている光景を見ることができよう。しかし、初期の、真のワンダーフォーゲルを特徴付けていた「はずみ」、跳躍は今や存在しない。

一八九七年のある朝、ベルリン法学部の学生フィツシャーは、シュトレーリッツのギムナジウムの生徒何人かと共に、近隣の森へと出発した。それは、高校の生徒たちの脱走であった。彼らが息を詰まらせていたのは、当時の悪趣味や醜悪さ——その不幸な痕跡を(ベルリ